文章の構成に対する意識を高め，内容を的確に読み取る力の育成
－段落相互の関係を意識させる要約指導の工夫－

長期研究員　本　間　　郁

《研究の要旨》

本研究では，「深い学び」の基盤となる，文章の内容を的確に読み取る力の育成を目指した。そのためには，各段落の内容を正しく読み取る力や，段落相互の関係に対する意識の向上が重要であると考えた。そこで，説明的文章を題材に，対話的な学習活動を取り入れながら，各段落の内容を要約させた。さらに，その要約を活用し，段落相互の関係を可視化することで，文章の構成に対する意識を向上させる工夫をした。その結果，これらの手だては，文章の内容を的確にとらえる力の向上において，効果的であるということが分かった。

Ⅰ　研究の趣旨

研究協力校では，文章が長文化したり，構成が複雑化したりすると，文章を俯瞰的に見て要旨をとらえることができず，説明的文章に対して苦手意識をもつ生徒が多い。その要因は，主に，各段落の内容を正しく読み取る力の不足や段落相互の関係に対する意識不足が想定される。

そこで，文章の内容を的確に読み取る力を育成するために，形式段落を，文章を構成する小さなブロックとしてとらえて，その内容を適切に要約させ，段落相互の関係に対する意識の明確化を図ろうと考えた（**図１**）。

一方，平成28年度全国学力・学習状況調査報告書（中学校国語）におけるＢ問題（説明的な文章を読む）の分析結果では，「文章の構成を捉えて読むことに課題がある」と報告されており，高等学校においても取り組まなければならない継続的な課題であると考えられる。

以上のことより，文章の構成に対する意識を高め，内容を的確に読み取る力の育成について研究することは，研究協力校のみならず，国語科における今日的な課題の一端を解決することにつながると考え，研究主題を設定した。

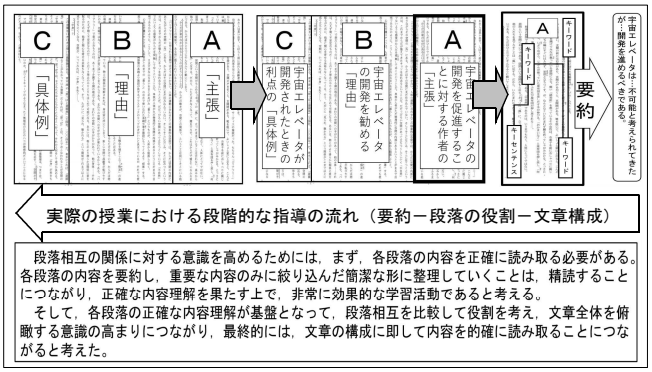

図１　内容を的確に読み取る力と要約との関連性

Ⅱ　研究の概要

１　研究仮説

説明的文章の指導において，以下の視点に基づく手だてを講じれば，段落相互の関係を意識するようになり，文章の内容を的確に読み取る力が育成されるであろう。

【視点１】段落の内容を正確にとらえさせたり，段落の役割に気付かせたりするための要約の指導

【視点２】文章の構成や適切な要約についての意識の向上を図る対話的な学習活動の工夫

２　研究内容

(1)【視点１】に基づく〈手だて１〉

○本文読解の前に行う要約

(2)【視点１】に基づく〈手だて２〉

○要約を活用した付箋を用いた，段落構成の可視化

(3)【視点２】に基づく〈手だて〉

○要約の知識・技能の習得と要約の最適解作成へ向けた，実感を伴う対話的な学習活動

３　研究の実際

(1)　授業実践Ⅰの概要

第１学年の国語総合で，山崎正和著『水の東西』を題材に，２クラスで総時数８時間の授業実践を行った（研究協力校は実業高校であり，対象の２クラスは異なる学科である）。このうち，最初の時間にプレテストと事前意識調査，最後の時間にポストテストと事後意識調査を実施した（**図２**）。

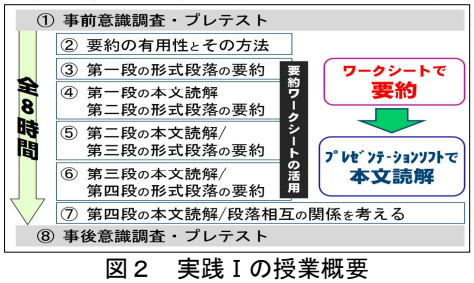

図２　実践Ⅰの授業概要

(2)　実践Ⅰにおける手だての具体的内容

①　【視点１】に基づく〈手だて１〉について

全体での本文読解の前に，各形式段落を自力で要約させた。第２時の「要約の方法」の知識を用いて，キーワードやキーセンテンスを探させたり，「ＡはＢである」などの要約の基本構造を理解させたりしながら，必要な要素を精選することで，最適解の作成を目指した。

また，正確な読み取りの力を育成するために「要約力UPワークシート」を作成した（図３）。このシートには，自力で作成した要約とペアからのコメントを受けた後に作成した「マイベスト（最適解）」の要約を隣り合わせにすることで，記述内容の変化を見取ることが容易にできるようにするなどの工夫を施した。

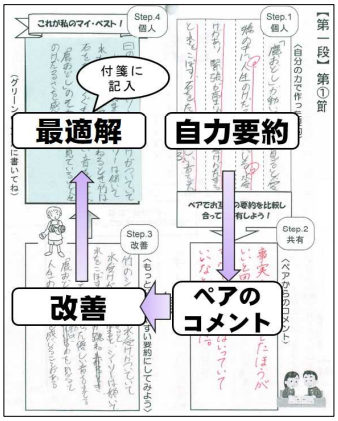

図３　要約力UPワークシート

② 【視点１】に基づく〈手だて２〉について

最終段落までの読解終了後，Ａ３ボード上に，各形式段落の要約を記入したすべての付箋を意味段落ごとに配置し，文章全体の構成を可視化してとらえさせた。

③ 【視点２】に基づく〈手だて〉について

導入時に，要約の必要性や適切な要約方法について，生徒自身にペアワークの中で考えさせた。また，各形式段落の要約時にもペアによる相互添削を行わせた（図４）。

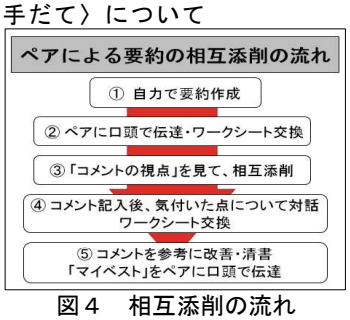

図４　相互添削の流れ

(3) 授業実践Ｉの分析

① 【視点１】に基づく〈手だて１〉の分析

試行錯誤しながら自分の力で要約に取り組み，言葉を吟味することにより，筆者の主張などの段落の要点に対する意識化が図られた。さらに，読解上の疑問点を明確にさせた上で，本文読解に取り組ませることができた。

また，「要約力UPワークシート」を作成・活用したことにより，ペアのコメントを文字情報として残すことができた。記録に残すことで，要約作成のポイントを振り返ることができるようになった。生徒は授業を重ねるごとに要約に習熟し，形式段落の内容を正確に読み取るための，妥当性の高い要約を作成することができた。

② 【視点１】に基づく〈手だて２〉の分析

Ａ３ボード上に，要約を記入したすべての付箋を配置し，意味段落をつなぐ言葉を考えて，同等関係や対比関係等の段落相互の関係について考える学習を行った（図５，図６）。生徒は，事前に配付した「文と文，段落と段落との関係を表す言葉プリント」を参考にしながら，グループワークの中で積極的に意見交換していた。

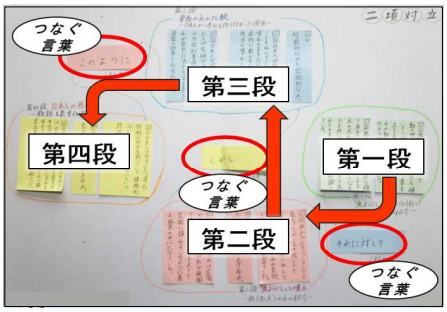

図５　付箋を配置したボード記入例

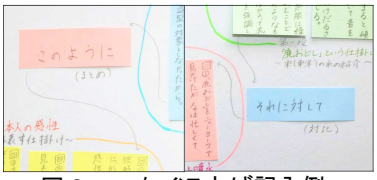
図６　つなぐことば記入例

③ 【視点２】に基づく〈手だて〉の分析

日常生活や将来社会に出て働く場面等を想定させ，ペアワークで要約の有用性を考えさせた。要約方法の学習時にも，ペアワークの後に全体で共有化することで，生徒は中学校での学びを振り返りつつ，一人では気付かなかった要約方法のポイントを確認することができた。

また，要約の最適解作成へ向けた，対話的な学習においては，ペアから要約の改善に向けたコメントをもらうことで，実感を伴う充実した活動となった。

④ プレテストとポストテストによる検証

テストの概況とｔ検定※1の結果を図７に示した。検定の結果，要約力を問う問題において有意差が認められた。

テスト結果から，授業実践を行ったＡ群は，実践Ｉで重点的に指導した要約の学習が成果を発揮し，プレテストより難化したポストテストでも，通常授業を行ったＢ群ほど得点が下がらなかったと推察できる。

※1　２回のテストの平均値には，統計的有意差があるか否かをみる検定。

〈対　象〉
① 実践授業クラス＝Ａ群（76名）
② 通常授業クラス＝Ｂ群（78名）
＊プレとポストの両方を受験した生徒を検証対象とした。

〈内　容〉
高校入試程度の初見の「評論」を読み、20分間で解答
問一 … 形式段落の要約　（記述式・５点）
問二 … 形式段落の要旨　（選択式・２点）
問三 … 形式段落相互の関係（選択式・２点）
合計　９点満点

Ａ群のテスト結果（実践Ｉ）

	プレテスト	ポストテスト	差
問一（５）	52.2%	44.0%	−8.2%
問二（２）	75.0%	66.0%	9.0%
問三（２）	48.5%	50.5%	2.0%
平均点（９）	56.4%	50.3%	−6.1%

Ｂ群のテスト結果（実践Ｉ）

	プレテスト	ポストテスト	差
問一（５）	52.0%	30.8%	−21.2%
問二（２）	77.0%	61.5%	−15.5%
問三（２）	50.0%	47.0%	−3.0%
平均点（９）	57.1%	41.2%	−15.9%

【検証方法と結果】

〈検証方法〉Ａ･Ｂ群間で、プレとポストの「平均点の差」について、ｔ検定を実施。

〈結　果〉Ａ･Ｂ群間において、要約の問題（問一）および合計点に、有意差あり。
問一（P=.05, df=152, t=2.07）
合計点（P=.05, df=152, t=2.39）

図７　テストの概況と検定結果（実践Ｉ）

(4) 授業実践Ⅱの概要

伊藤進著『コミュニケーションは創造的に』を題材に，総時数９時間で授業実践を行った。実践Ｉ同様，最初の時間にプレテストと事前意識調査，最後の時間にポストテストと事後意識調査を実施した。また，各形式段落の要約，形式段落の役割に名前を付ける活動，意味段落の読解と構成図の作成及び全文を要約する活動を行った。

① 【視点１】に基づく〈手だて１〉について

要約方法の復習を行いつつ，キーワードや中心文の発見の過程を，対話による活動を取り入れて丁寧に進めながら，実践Ｉ同様に「要約力UPワークシート」を用いて，本文読解の前に要約する活動を行った。

また，「段落の役割・関係・構成をとらえるワークシート」（以下，「YKKワークシート」）や，付箋を配置する「YKKサポートシート」を作成・活用した。

② 【視点１】に基づく〈手だて２〉について

「YKKワークシート」「YKKサポートシート」を活用し，段落相互の関係から段落同士をつなぐ言葉を考え，段落の役割を記入した付箋を活用し，段落構成図を作成させた。

③ 【視点２】に基づく〈手だて〉について

段落相互の関係や構成について，実践Ⅰと同様にグループで話合いをさせた。また，最終時に全文要約に取り組ませた。

(5) 授業実践Ⅱの分析

① 【視点１】に基づく〈手だて１〉の分析

実践Ⅱでは，段落相互の関係を考える活動の確保のため，要約の相互添削に取り組む段落を絞った。実践Ⅰの活動により，ペアでの要約はスムーズに展開した。また，段落の中心文を見つける活動では，本文を根拠として自分の考えを発表する姿が見られた。さらに，読解の際にグループ内で意見交換を行った結果，生徒は筆者の主張を身近な問題としてとらえ，読解を深めることができた。

② 【視点１】に基づく〈手だて２〉の分析

本文後半の意味段落において「YKKワークシート」を作成・活用し，文章全体の中における各段落の役割を名付けたり，段落間の接続語を考えさせたりした。その結果，本文の段落相互の関係を一目でとらえることができるようになり，非常に効果的に学習活動を進めることができた（図８）。

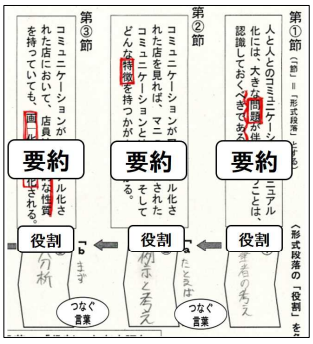

図８ YKKワークシート記入例

③ 【視点２】に基づく〈手だて〉の分析

形式段落に見立てた付箋を用いて段落の構成図（YKKサポートシート，図９）を作成する際，工業高校生らしく，電子回路さながらのユニークな構成図を作成した。また，グループ内で自分の構成図の意図を納得してもらおうと懸命に説明する姿が見られた。その後，構成図を交換してコメントを記入させた際には，他者の工夫に対して自分の考えを意欲的に記入していた。最後に，付箋アプリケーションを利用して，代表生徒に構成図の意図を発表させたが，その内容を聞き，自分の構成図と比較しながら考えを深めていた。また，全体のまとめとなる400字の全文要約では，教科書やワークシートを見直し，試行錯誤しながらも集中して記述していた。

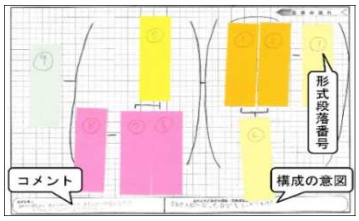

図９ YKKサポートシート記入例

④ プレテストとポストテストによる検証

テストの概況とｔ検定の結果を図10に示した。その結果，Ａ群で，実践Ⅱで焦点化を図った「要約を用いて，意味段落のまとまりや構成を理解すること」に関わる問題について，有意差が認められた。

〈対　象〉
① 実践授業クラス＝Ａ群（71名）
② 通常授業クラス＝Ｂ群（41名）
＊プレとポストの両方を受験した生徒が検証対象。

〈内　容〉
高校入試程度の初見の「評論」を読み、25分間で解答
問一 … 形式段落の要約 （記述式・６点）
問二 … 本文の読解 （選択式・各３×２=６点）
問三 … 段落内容のまとまり （選択式・３点）
合計 15点満点

Ａ群のテスト結果（実践Ⅱ）

	プレテスト	ポストテスト	差
問一（６）	64.8%	58.2%	−6.6%
問二（６）	61.3%	63.3%	2.0%
問三（３）	26.7%	49.0%	22.3%
平均点（15）	55.8%	58.5%	2.7%

Ｂ群のテスト結果（実践Ⅱ）

	プレテスト	ポストテスト	差
問一（６）	68.7%	62.7%	−6.0%
問二（６）	72.0%	62.2%	−9.8%
問三（３）	31.7%	44.0%	12.3%
平均点（15）	62.6%	58.7%	−3.9%

【検証方法と結果】

〈検証方法〉Ａ・Ｂ群それぞれのプレとポストの「平均点の差」について、ｔ検定を実施。

〈結　果〉Ａ群のプレ-ポスト間の「平均点の差」のうち、段落内容のまとまりに関する問題で有意差あり。（P=.05, df=70, t=-2.71）

図10　テストの概況と検定結果（実践Ⅱ）

Ⅲ　研究のまとめ

１　研究の成果

今回の研究により，対話的な学習を取り入れながら，形式段落ごとの正確な読み取りをさせるために「要約を考えること」及び「要約を用いて段落構成を意識させること」が，文章の的確な理解に資する効果的な学習方法であることが分かった。また，意識調査からも，評論を読むときの意識に変容が生じていることや，実践の手だてが適切であったことを読み取ることができた（図11）。

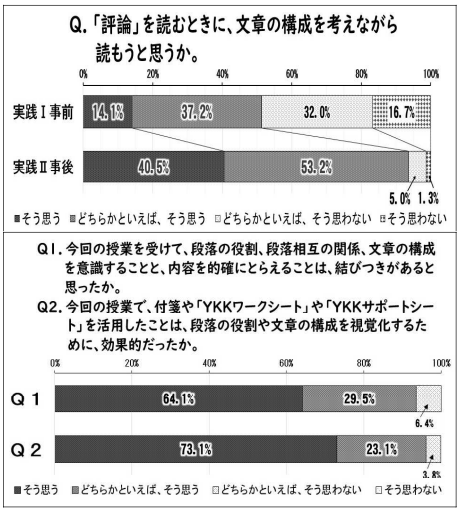

図11　授業実践前後の意識調査

２　今後の課題

実践Ⅰにおいては，プレ-ポストテストの要約問題に字数指定はなく，５行以内で記述させていたが，実践Ⅱでは字数制限を設けた。この時，同内容のままで，字数を削るために「言い換え」や「抽象化」が必要となったが，75%程度がうまくできなかった。妥当性の高い言い換えができる能力は，本文の的確な理解と密接な関係があると考えられるため，新たな研究課題としたい。